

*The Journal of
Nagasaki University of Foreign Studies
No. 26 2022*

**Be 動詞の代名詞補部の統語的特異性
—現代英語と近代英語初期のコーパス比較研究—**

藤内 則光

A Study on Some Syntactic Irregularities of Pronominal
Complements of the Copulative Be
A Comparative Analysis of Corpora between Present-day and Early Modern
English

FUJIUCHI, Norimitsu

長崎外大論叢

第26号
(別冊)

長崎外国語大学
2022年12月

Be 動詞の代名詞補部の統語的特異性
—現代英語と近代英語初期のコーパス比較研究—

藤内 則光

A Study on Some Syntactic Irregularities of Pronominal
Complements of the Copulative Be
A Comparative Analysis of Corpora between Present-day and Early Modern
English

FUJIUCHI, Norimitsu

Abstract

This is a quick comparison of syntactic differences in case marking in pronominal complements of copulative 'be', nominal versus accusative, between corpora of the 1960s and 1990s, both American and British, the comparison of the same differences between Present-Day English and Early Modern English between 1500 and 1710. The data shows that there are no pronominal complements in the accusative case in the Early Modern English period, and there are more pronominal complements in the accusative case in the 1990s corpora than the 1960s ones.

キーワード

Be 動詞、コーパス言語学、Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English

1. はじめに

本稿は繫辞 be の統語的特異性の一つである代名詞補部の格表示についてコーパス調査を行い、その結果の報告を行うものである。比較の対象は1960年代と1990年代の現代英語の書き言葉コーパスと、それら現代英語と近代英語初期の書き言葉コーパスである。

報告される統語的特異性とは、例えば

(1a). It is I.

(1b). It is me.

のように、代名詞補部の格表示が主格か対格かの違いで、規範的には主格表示が正しいとされているものである。統語事実としては(1b.)において me は受動化されないので厳密な意味では対格ではないが、形態的に主格表示でもない。そのため、本稿ではその代名詞の不明瞭な格表示を形態的な特徴から対格と呼称するが、統語的に対格として使用されていると判断するものではない。

代名詞補部の格表示に関する先行研究としては、Oxford English Dictionary (以下、OED) の記載では口語・俗語の類、または学のない人の話し言葉で主格を表す me の例として、Shakespeare の

The Two Gentlemen of Verona の例、"1591 Shakes. Two Gent. ii. iii. 25 Oh, the dogge is me, and I am my selfe." の用例があり、自分の好み、能力、個性を表す用法として、"1899 J. London Let. 29 July (1966) 47 This is me all the time and all over." が挙げられている。また、Belletti (1988) は Be 動詞補部の格表示を分格 (partitive case) とし、Chomsky (1986) ではこの名詞類は述語であり項ではないので格表示は不要としている。述語であるという文法機能は項の格や主題役割のように統語素性として記述できるとしたのが藤内 (2006) 以降の述語演算理論である。

2. 調査の概要

使用されたコーパスは1960年代の米語の書き言葉コーパスである Brown (ICAME よりライセンスを受けたデータは Brown1 と Brown2 に分かれている) と英語の書き言葉コーパスである LOB、1990年代の米語の書き言葉コーパスである Frown と英語の書き言葉コーパスである FLOB、そして1500年から1720年までの近代英語初期の書き言葉コーパスである Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English (以下、PPCEME) である。Brown と LOB、Frown と FLOB はラインナンバー付きのテキストデータで、そのままコンコーダンサーで取り扱える。PPCEME は統語解析されているが、統語解析されたデータである psd 書類はテキストデータではないのでコンコーダンサーでは取り扱えない。そのため解析にはまず Java アプリである CorpusSearch 2 を使用して、条件を指定した抽出を行った。得られた結果はテキストデータとして出力された。

得られた結果はテキスト形式ではあるが、本稿が使用したデータでは構造記述を含んで最大で 780315 行あり、そのままコンコーダンサーの検索対象とすると一回の検索終了までに何十分もかかり、また英文だけでなく構造記述データがヒット項目に含まれるため検索に無駄な時間がかかるので、整形が必要である。しかしながら、このサイズのデータでは、手作業で整形を行うと年単位の時間が必要となる。そこで構造解析データは csv 書類のようにタブ区切りであるため、MS Excel を利用して各行に通し番号を打ち、データ並べ替え機能を利用して構造記述と不要なタグや空白行を削除することで取り除き、57179 行のデータに整形した。

前述のように psd 書類はコンコーダンサーでは取り扱えないので、このようにして整形して得られたデータを検索データとして使用し、整形前の構造記述を含むデータをヒットした例文の構造確認に使用した。この PPCEME の検索コーパスと Brown と LOB、Frown と FLOB の検索のためのコンコーダンサーは AntConc 3.5.9 for Windows 64bit を使用した。検索結果は MS Excel 書類とテキストデータで保存している。保存されているデータは、ヒットした項目のコンコーダンサーでの KWIC 検索結果リストのライン番号、どのコーパスのどのファイルの何行目かのデータ、主格か対格かの判定と、実際の英文サンプルである。

3. コーパスの概要

Brown 系列のコーパス、Brown と LOB、Frown と FLOB は "the Brown family of corpora" と呼ばれていて、Brown と LOB、Frown と FLOB、Brown と Frown、LOB と FLOB を比較する場合には一定の互換性がある研究が可能である。本稿はその 4 つのコーパスをすべて検索して比較している。

PPCEME は1500年から1710年までの210年間のテキストを含んでいるが、英語史的な事実には必ずし

も沿わない形でコーパスが独自に時期を E1、E2、E3 の 3 つに小区分していて、E1: 1500年から1569年、E2: 1570年から1639年、E3: 1640年から1710年と分けられている。Shakespeare の活躍は E2期に相当する。各小区分に何語のコーパスが含まれるかと、どのジャンルのテキストがどの程度含まれるかは巻末に記す。

PPCEME は使用するには MS-DOS の知識と生成文法の知識が共に必要で、使用者を限定しうる。MS-DOS の知識が必要な点は、本稿の場合はコマンドラインで CS_2.003.04.jar を起動させ、ルートディレクトリにある統語解析コーパス本体とクエリファイル、出力結果を保存するサブディレクトリを指定する必要があることが挙げられる。Windows での実際の作業行程は

①システムに Java をインストールし、CorpusSearch 2をダウンロードするなどして入手する。Java アプリ CorpusSearch 2は CS_2.003.04.jar などの名前で、任意のディレクトリに置いて使用する。ここではルートディレクトリとする。

②ハードドライブのルートディレクトリに、統語解析されたコーパスファイルを保存する corpus サブディレクトリと、クエリファイルと出力結果を保存する queryandout サブディレクトリを作成する。サブディレクトリ名は任意であるが、大文字と小文字は区別される。

③クエリファイルを作成して、②のサブディレクトリに保存する。クエリファイルは .q の拡張子を持つテキストファイルである。

④コマンドプロンプトを起動し、カレントディレクトリを CS_2.003.04.jar のあるルートディレクトリにする。

⑤以下のコマンドラインを入力する、もしくはペーストする。

```
java -classpath "C:\CS_2.003.04.jar" csearch/CorpusSearch
```

⑥ Enter name of query file (q to quit, ? for help): と聞かれるので、それに続けてクエリファイルのパスを以下のように指定する。

```
c:\queryandout\query_be_and_accusative_0.q
```

⑦ Enter name(s) of source file(s), q to quit: と聞かれるので、コーパスファイルのパスを

```
c:\corpus\*
```

などと指定する。*はそのサブディレクトリ以下のファイルすべてを表すワイルドカードである。

⑧出力は .out ファイルとして生成される。 .out ファイルはテキストファイルで、テキストエディタで開くことができる。作成許可と上書き許可を求められたら y と返答して続行する。

である。CorpusSearch 2の動作は Win 7と Win 8、Win 10で確認している。

生成文法の知識が必要な点は、構造記述のアノテーションが生成文法の原理と媒介変項のアプローチ、別名統率束縛理論の理論的枠組での句構造記述に従った品詞タグと統語タグによって書かれていることである。例えば主節は IP-MAT、名詞区内の名詞の前の冠詞は D と記述されている。IP とは節を INFL の最大投射範疇と考える構造記述で、D とは決定詞 (Determiner) で、共に生成文法における範疇名である。

またクエリファイルを記述するときのコマンドには、Dominates や HasSister などの句構造規則の知識が必要なものと、CCommands のように構成素統御の知識が必要なものがある。CorpusSearch

2の検索の対象とする構造は、これらのタグや語の形態を項、コマンドを述語として記述し、検索する使用例の構造を指定する。加えて、出力された句構造も改行とタブによって樹形図を模したものとなっていて、さらに構造内には *a* 移動を想定した構成素の痕跡が記述されている。これらの理由のため、PPCEME はコーパス言語学、文献学以外に生成文法の知識が必要なので、導入してもすぐに理解して使えるとは限らない。

留意事項として、PPCEME と Brown 系列のコーパスは互換性がないことがある。理由の一つにその規模とジャンル構成が異なることがある。Brown 系列のコーパスの方が語数が多く (Brown 系列は各コーパス 100 万語規模に対し、PPCEME は 170 万語)、PPCEME には文学 (聖書や Shakespeare の戯曲 *The Merry Wives of Windsor*) が含まれている。また PPCEME は統語解析されているコーパスであるが、Brown と LOB、Frown と FLOB はそうではなく、品詞タグが付いている Browntag コーパスと LOBTAG コーパスは構造の分析に不向きであるためサンプルに含めていない。さらに PPCEME は近代英語初期のコーパス、Brown 系列のコーパス現代英語であるため語の綴りや屈折が並行せず、特に現代英語では *you* が主格と対格が単複同形であるのに対し、近代英語初期ではそれぞれ語が異なる。そのため本稿では判明した統語的事実について理論化を試みず、比較できる Brown 系列のコーパスは調査結果を比較するが、PPCEME の調査結果は提示するに留める。

4. 現代英語の調査結果

(1a) と (1b) の違いは、be 動詞補部にどの形態の代名詞が生起するかであり、主語が何であるかは重要ではない。そのため、一部論理的に不自然な組み合わせがあるが、be 動詞の屈折形から *been* と *being* を除いた *be, am, are, is, was, were* と、主格と対格が同じ形態の *you* を除いた人称代名詞の屈折形、*I, me, we, us, he, him, she, her, they, them* を組み合わせて (2) のようなキーワードリストを作成し、AntConc 3.5.9 の Advanced サーチによってリストから検索語を一括で読み込ませて検索を行っている。

(2) 検索キーワード一覧

am I	are I	is I	was I	were I	be I
am me	are me	is me	was me	were me	be me
am we	are we	is we	was we	were we	be we
am us	are us	is us	was us	were us	be us
am he	are he	is he	was he	were he	be he
am him	are him	is him	was him	were him	be him
am she	are she	is she	was she	were she	be she
am her	are her	is her	was her	were her	be her
am they	are they	is they	was they	were they	be they
am them	are them	is them	was them	were them	be them

このキーワードを与えて、KWIC リストから任意の主語 + be 動詞の屈折形 + 代名詞補部の語順になっているものを抜き出し、件数を比較すると以下のようなになる。

(3) 検索結果

年代	1961	1961	1992	1991
コーパス	Brown	LOB	Frown	FLOB
Nom	18	17	3	7
Acc	6	4	9	8

1961年に作成された Brown と LOB では、主格と対格のヒットがそれぞれあるが主格が対格と比べて3倍ほど優勢であるが、1991年と1992年にそれぞれ作成された FLOB と Frown では主格と対格の分布が逆転しており、Frown では Brown とは逆に対格が主格の3倍ほど優勢である。ただし、対格のヒット数は Brown から Frown で3、LOB から FLOB で4の増加である。これは急激な増加とは言えないため、逆に主格のヒット数の減少、つまり使用頻度が下がったとも言える。

生起環境は this/that/it + is/was に代名詞補部が後続するのがほとんどであった。to be の後ろに代名詞補部が後続する場合、主格のヒット例はなかった。I am he. のような例もまた検索されなかった。一般に be 動詞 + 対格代名詞は非標準形と思われるが、30年程度の短いスパンでこれほどの変化が起こったのは驚きである。これから分かることは、1961年の書き言葉で既に be 動詞 + 対格代名詞の使用例があり、1991年、1992年のコーパスでは be 動詞 + 対格代名詞の使用例が比率の上で増えていることである。巻末にヒットしたコーパスの一覧を示す。

5. 初期近代英語の調査結果

1961年のコーパスに対格の代名詞補部が存在したため、その源流を探るために手持ちにあるそれより古いコーパスとして PPCEME を活用して同様の検索を行った。現代英語と同様に、この調査においては主語が何かは問題としないので、PPCEME の統語解析済みコーパスファイル psd 書類を調べるための CorpusSearch 2 のクエリファイルは、以下のような記述とした。

(4) クエリファイル

node: IP-MAT

query: (BEP Precedes PRO)

OR (BE Precedes PRO)

OR (BED Precedes PRO)

node: タグは検索の対象とする領域で、統語タグ IP-MAT は主節を表す。主節領域内に従属節が補部選択または付加によって含まれている場合でも従属節は検索領域から除外されないため、最も広い領域の検索となる。ただし、検索結果はヒットした条件を含む最小の節が抽出される。

query: タグは検索コマンドを指定するもので、品詞タグ BEP は be の現在形、BE は be の不定詞、BED は be の過去形で、PRO は代名詞類である。検索の際、代名詞補部は品詞タグで検索し文法的機能をタグで指定していない。Precedes というコマンドは先行することを意味し、付加詞のように構成素統御の範囲外の構成素を含める事ができる。このクエリは、be 動詞の現在形、過去形、不定詞が主節内で代名詞に先行している事例すべてを調べるもので、このようにクエリは厳密に作り込まず、意図せず検索範囲から排除されるヒット項目を漏らさないように配慮している。

クエリの方で be 動詞を指定した検索をしているので、コンコーダンスーはその中に含まれる代名詞の屈折形を指定している。屈折形は OED で1500年から1710年までに使用例が載っている形態をキーワードとしている。近代英語初期は人称代名詞の二人称単数形と複数形が同形態でないのが、現代英語の調査から外した二人称単数形の thou の異形態を含めているが、複数形は you と yew が主格と対格において同形態で構造解析によっても格を判別できないので、これら2つの異形態は検索対象から除外している。

(5) 検索キーワード一覧

一人称				二人称				三人称			
単数		複数		単数		複数		単数		複数	
主格	対格	主格	対格	主格	対格	主格	対格	主格	対格	主格	対格
I	me	we	us	thoo	thee	ye	<u>you</u>	he	hym	they	them
Ich	mee	wee	vs	thou		<u>you</u>	<u>yew</u>	hee	him	thay	thaim
ich			vss			<u>yew</u>	youe	she	hye		thaime
che							yow	shee	her		thaym

KWIC リストで該当する構造を見つけた場合、判定は PPCEME の統語解析結果に従うこととした。PPCEME の構造解析では、繫辞の be 動詞の補部に名詞類がある場合は NP-OB1 という統語タグが付いている。そのため、コーパスの構造記述が NP-SUB であるか NP-OB1 であるかによって、be 動詞の後ろの代名詞が be 動詞の補語か補文の主語であるかを判別した。be 動詞に構成素統御される NP-OB1 の位置にある代名詞が検索のターゲットである。件数を比較すると以下ようになる。

(6) 検索結果

時期	Nom	Acc
E1	26	0
E2	24	0
E3	13	0
Total	63	0

ヒット数は63で現代英語のヒット数72より少ないが、ヒットしたものすべてが主格であるという結果が出た。大変極端な結果が出たので、キーワードより主格の代名詞をすべて取り除いて再検索したが、検出枠を満足する対格の代名詞は存在しなかった。当初 be 動詞の形態により現在形と過去形と不定詞に分けて調べていたので、検索コマンドを統合してコーパスを再抽出して再度検索を行ったが、それでも同じ結果が出た。

生起環境は現代英語同様に this/that/it + is/was に代名詞補部が後続するのがほとんどであったが、I am he. のような例も聖書のコーパスより含まれている。to be の後ろに代名詞補部が後続する場合も、現代英語では対格しかなかったところ、近代英語初期では主格のヒット例しかなかった。

E3期は主格のヒット数が13と他の期間より少なくはなっているが、E3期のコーパスに聖書が含まれていないことがその原因と考えられる。聖書のコーパスは、E1期は Tyndal の英訳聖書で tyndold.e1 はモーセ五書、tyndnew.e1 は新約聖書、E2期は欽定英訳聖書で authold.e2 は First Westminster

Company 訳、authnew.e2は Second Oxford Company 訳で、ヒットしたテキストは多くがヨハネによる福音書であった。巻末にヒットしたコーパスの一覧とコーパスのジャンル一覧を示す。

6. まとめ

本稿には検索手順やキーワードなどがすべて公開されているので、再現実験・追証が可能である。その上で事実だけ述べれば、be 動詞の対格代名詞補部は書き言葉コーパス PPCEME によれば近代英語初期には存在しない。しかしながらコーパスは必ずしもその時代の言語事実のすべてを記述していないため、本稿での調査では一定の傾向がわかったに過ぎない。一般的な傾向として be 動詞 + 対格代名詞の使用例は現在に近くなるにつれて拡大している、逆に言えば時代を遡れば少なくなるとは予想ができるが、近代英語初期においては使用例がまったくないと想定していなかった発見であった。そのため、中英語期のコーパスを調べてもヒットはないと想定できるため、以降の研究において中英語のコーパス Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English を調べる必要はないと判断する。

OED には口語・俗語の例として主格を表す *me* の用例があるが、それが芝居の中の教養のない人のセリフとしてではなく日常的な書き言葉にまで影響を与えるのは、PPCEME のカバーする時期以降の英語において見られると予想できる。the Brown family of corpora では、現代英語において英語より米語において be 動詞の対格代名詞補部が拡大し、主格補部が衰退しているように見えるデータが出たので、同じように過去のコーパスを調べるのであれば英語ではなく米語のコーパスの中にこそ発見があるかもしれないが、OED にあった *The Two Gentlemen of Verona* の例は英国が米国に植民を始める前であるので、本稿の調査を継続するのであれば近代英語後期以降の英語を調べるのが良いであろうと推測する。

トレンドとしては、be 動詞の代名詞補部の格表示は近代英語期の be 動詞のデータでは規範的な正しさに沿っていて、最近の使用例にそれからの逸脱が見られるため、何らかの理論化はその逸脱を研究することによって見いだされると思われる。今後 be 動詞 + 対格代名詞の使用例が増え、be 動詞 + 主格代名詞の使用例を駆逐するほどになった場合、今から500年ほど前の be 動詞の姿と正反対になる現代英語の be 動詞をどのように理論化すれば良いのか、興味深い。

Acknowledgement

I would like to express my gratitude to 'Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English', 'CorpusSearch 2', and 'AntConc', especially the creators of them, Mr. Anthony Kroch, Ms. Beth Randall, and Mr. Anthony Lawrence, respectively.

コーパス諸元とヒット一覧

PPCEME の E1から E3までのコーパス数

	Helsinki	Penn 1	Penn 2	Total
E1 (1500-1569)	191,737	192,661	183,397	567,795
E2 (1570-1639)	191,074	214,993	222,396	628,463
E3 (1640-1710)	171,885	188,786	180,924	541,595
Total	554,696	596,440	586,717	1,737,853

PPCEME のジャンル別コーパス数

Text genre	Number of words	Percentage
Bible	133,585	7.70%
Biography, autobiography	36,436	2.10%
Biography, other	50,490	2.90%
Diary, private	127,689	7.30%
Drama, comedy	110,078	6.30%
Educational treatise	110,349	6.30%
Fiction	112,438	6.50%
Handbook, other	105,435	6.10%
History	103,769	6.00%
Law	115,621	6.70%
Letters, non-private	60,771	3.50%
Letters, private	116,423	6.70%
Philosophy	83,208	4.80%
Proceedings, trials	137,249	7.90%
Science, medicine	40,789	2.30%
Science, other	77,446	4.50%
Sermon	93,932	5.40%
Travelogue	122,145	7.00%
Total	1,737,853	100%

Brown と LOB, Frown と FLOB のヒットコーパス一覧 (File # の末尾はヒットしたラインナンバー)

Corpus	File #	Nom vs Acc	Corpus	File #	Nom vs Acc
Brown 1	F08 0130	Nom	LOB	B11 56	Nom
Brown 2	F08 0130 6	Nom	LOB	G27 148	Nom
Brown 1	P09 0740	Nom	LOB	L11 131	Acc
Brown 2	R03 0870 7	Nom	LOB	R09 110	Nom
Brown 1	D01 1660	Nom	LOB	F10 199	Nom
Brown 2	D01 1650 12	Nom	LOB	R09 108	Nom
Brown 2	P13 1190 10	Nom	LOB	P04 59	Nom
Brown 2	P09 0740 11	Nom	LOB	G45 178	Nom
Brown 1	R03 0880	Nom	LOB	J37 50	Nom
Brown 1	P13 1190	Nom	LOB	G27 146	Nom
Brown 1	F08 0120	Nom	LOB	R04 172	Acc
Brown 2	F08 0110 10	Nom	LOB	F29 175	Nom
Brown 1	J64 0930	Nom	LOB	J60 138	Nom
Brown 2	D14 1500 5	Nom	LOB	P24 105	Nom
Brown 1	N04 0320	Acc	LOB	L21 42	Nom
Brown 2	N04 0320 2	Acc	LOB	K23 169	Nom
Brown 1	F25 0720	Nom	LOB	R09 109	Nom
Brown 2	F25 0720 4	Nom	LOB	K14 56	Nom
Brown 1	L14 1690	Nom	LOB	K23 174	Nom
Brown 2	L14 1680 7	Nom	LOB	N14 170	Acc
Brown 1	P13 0640	Acc	LOB	K18 110	Acc
Brown 2	P13 0640 5	Acc			
Brown 1	P14 1530	Acc			
Brown 2	P14 1530 1	Acc			

Corpus	File #	Nom vs Acc	Corpus	File #	Nom vs Acc
FROWN	F06 4	Nom	FLOB	L12 233	Nom
FROWN	N07 86	Acc	FLOB	K02 29	Acc
FROWN	F01 74	Acc	FLOB	D02 39	Nom
FROWN	P07 22	Nom	FLOB	P17 163	Acc
FROWN	N07 83	Acc	FLOB	L15 212	Acc
FROWN	N01 1	Acc	FLOB	J58 178	Nom
FROWN	G62 150	Acc	FLOB	K23 95	Nom
FROWN	K13 51	Acc	FLOB	F35 122	Nom
FROWN	K11 125	Nom	FLOB	J58 177	Nom
FROWN	A41 142	Acc	FLOB	L23 101	Nom
FROWN	L21 138	Acc	FLOB	A35 40	Acc
FROWN	C10 201	Acc	FLOB	A17 74	Acc
			FLOB	B01 54	Acc
			FLOB	J58 179	Acc
			FLOB	K09 52	Acc

PPCEME のヒットしたコーパスの一覧とコーパスのジャンル一覧

	Sum	E1	E2	E3
Bible	27	13	14	
Comedy Drama	14	9	5	2
Sermon	3	1		2
Fiction	5	1	1	3
Proceedings of Trial	7		3	4
Private Letter	2			2
Science, Medicine	1	1		
Autobiology	1	1		
Philosophy	1		1	
Travelogue	1	1		
Treatise	1	1		

ID	Corpus	Period	Category
1	(AUTHNEW-E2-P2,10,20A.523)	E2	Bible
2	(TYNDNEW-E1-P2,10,20A.380)	E1	Bible
3	(AUTHNEW-E2-H,9,1J.1216)	E2	Bible
4	(AUTHNEW-E2-H,8,20J.1077)	E2	Bible
5	(AUTHNEW-E2-P1,18,1J.658)	E2	Bible
6	(TYNDNEW-E1-H,8,20J.718)	E1	Bible
7	(AUTHNEW-E2-P1,18,1J.649)	E2	Bible
8	(AUTHNEW-E2-P1,18,1J.652)	E2	Bible

9	(TYNDNEW-E1-P1,18,1J.453)	E1	Bible
10	(TYNDNEW-E1-P1,18,1J.455)	E1	Bible
11	(TYNDNEW-E1-H,4,20J.275)	E1	Bible
12	(AUTHNEW-E2-H,4,20J.416)	E2	Bible
13	(MERRYTAL-E1-H,147.433)	E1	Fiction
14	(VICARY-E1-P1,21.147)	E1	Science, Medicine
15	(HOXINDEN-1650-E3-P2,179.194)	E3	Private Letter
16	(TILLOTS-B-E3-H,452.118)	E3	Sermon
17	(TILLOTS-C-E3-P2,469.218)	E3	Sermon
18	(OATES-E3-P2,4,92.616)	E3	Proceedings of Trial
19	(AUTHNEW-E2-H,6,20J.693)	E2	Bible
20	(TYNDNEW-E1-H,6,20J.463)	E1	Bible
21	(HOXINDEN-1660-E3-H,281.200)	E3	Private Letter
22	(MIDDLET-E2-H,5.146)	E2	Comedy Drama
23	(MIDDLET-E2-H,20.461)	E2	Comedy Drama
24	(BEHN-E3-P1,149.41)	E3	Fiction
25	(DELONEY-E2-P1,23.460)	E2	Fiction
26	(VANBR-E3-H,58.430)	E3	Comedy Drama
27	(MIDDLET-E2-P2,56.371)	E2	Comedy Drama
28	(RALEIGH-E2-P1,1,223.260)	E2	Proceedings of Trial
29	(MIDDLET-E2-P2,66.713)	E2	Comedy Drama
30	(AUTHNEW-E2-H,9,1J.1214)	E2	Bible
31	(TYNDNEW-E1-H,9,1J.814)	E1	Bible
32	(VANBR-E3-P2,74.592)	E3	Comedy Drama
33	(UDALL-E1-P2,L847.111)	E1	Comedy Drama
34	(FISHER-E1-P2,335.39)	E1	Sermon
35	(OATES-E3-P2,4,92.644)	E3	Proceedings of Trial
36	(UDALL-E1-P1,L402.175)	E1	Comedy Drama
37	(UDALL-E1-P1,L431.202)	E1	Comedy Drama
38	(LISLE-E3-P1,4,111.429)	E3	Proceedings of Trial
39	(STEVENSO-E1-H,55.243)	E1	Comedy Drama
40	(AUTHNEW-E2-H,9,1J.1212)	E2	Bible
41	(AUTHNEW-E2-P2,9,20A.394)	E2	Bible
42	(TYNDNEW-E1-H,7,20J.599)	E1	Bible
43	(TYNDNEW-E1-H,9,1J.813)	E1	Bible
44	(TYNDNEW-E1-P2,9,20A.283)	E1	Bible
45	(LISLE-E3-H,IV,123C1.516)	E3	Proceedings of Trial
46	(UDALL-E1-P2,L1277.458)	E1	Comedy Drama
47	(UDALL-E1-H,L.364.340)	E1	Comedy Drama
48	(AUTHNEW-E2-P1,3,1A.1304)	E2	Bible

49	(TYNDNEW-E1-P1,3,1A.921)	E1	Bible
50	(THOWARD2-E2-P2,111.835)	E2	Proceedings of Trial
51	(THOWARD2-E2-P2,111.836)	E2	Proceedings of Trial
52	(SHAKESP-E2-P1,40,C1.157)	E2	Comedy Drama
53	(BEHN-E3-P2,174.66)	E3	Fiction
54	(AUTHNEW-E2-H,1,1J.43)	E2	Bible
55	(TYNDNEW-E1-H,1,1J.30)	E1	Bible
56	(UDALL-E1-P1,L533.370)	E1	Comedy Drama
57	(MOWNTAYNE-E1-P1,188.231)	E1	Autobiology
58	(TORKINGT-E1-H,54.259)	E1	Travelogue
59	(ELYOT-E1-H,148.91)	E1	Treatise
60	(AUTHNEW-E2-P1,18,1J.675)	E2	Bible
61	(TYNDNEW-E1-P1,18,1J.472)	E1	Bible
62	(BOETHEL-E2-P2,72.283)	E2	Philosophy
63	(BEHN-E3-H,160.91)	E3	Fiction

【参考文献】

The Oxford English Dictionary, Oxford University Press, 1928

Belleti, A.(1988), "The Case of Unaccusative," Linguistic Inquiry 19

Chomsky, N.(1986a), Knowledge of Language: Its Nature, Origin and Use. New York: Praeger.

藤内則光 (2006), 「統語的述語演算理論とその応用」, pp.209-229, 『長崎外大論叢』 第10号

藤内響子 (2016), 「初期近代英語における動詞の命題補部：特に現代英語において不定詞および動名詞の補部をとる動詞についての定量言語学的アプローチ」, pp.57-67, 『比較文化研究』 No.120, 2016

